

令和 2年 2月 7日

浜田市議会議長  
川 神 裕 司 様

議員名 西田 清久



## 調査研究活動報告書

下記のとおり調査研究のため研修等を行ったので、その結果を報告します。

### 記

1. 期 間 令和2年1月27日(月)～令和2年1月28日(火)
2. 視察先および研修テーマ  
【滋賀県大津市】  
主催： 公益財団法人 全国市町村研修財団  
全国市町村国際文化研修所  
令和元年度第3回市町村議会議員特別セミナーを受講  
\* 1月27日(月) 13:10～14:40  
「社会福祉と財政システム」  
京都大学大学院経済学研究科/地球環境学長 教授 諸富 徹氏  
\* 1月27日(月) 15:05～16:35  
「超高齢社会の現状と地域包括ケアによるまちづくり」  
東京大学高齢社会総合研究機構特任教授 辻 哲夫氏  
\* 1月28日(火) 9:00～10:30  
「児童福祉の現状と課題」  
関西大学人間健康学部人間健康学科教授 山縣 文治氏  
\* 1月28日(火) 10:50～12:20  
「“10年後の彼を見つめた就労支援”～未来への下ごしらえ～」  
東近江圏域働き・暮らし応援センター“tekito-”センター長 野々村 光子氏
3. 参加者 川上幾雄、 道下文男、 田畑敬二、 澁谷幹雄、 西田清久
4. 調査経費 35,380円  
(経費内訳 交通費 27,630円、受講料(振込手数料含む) 7,750円)



## 5. 調査研究活動の概要

### ○ 「社会福祉と財政システム」

諸富 徹氏

- \* 日本財政の現状
- \* 社会保障の財政規模
- \* OECDの「社会支出」による国際比較
- \* 福祉国家モデルと費用負担制度
- \* 日本の社会保障の特徴
  - ①当初ドイツ型社会保険システムとして出発し、次第に（イギリス的な）普遍主義的方向に移行していったこと
  - ②医療保険がまず整備され、年金が遅れて、しかし急速に膨らむという経過をたどったこと
  - ③非サラリーマン・グループ（農林水産業者、自営業者）が相対的に多い経済構造のなか、その取り込みを積極的に行ったこと（特に医療保険）
- \* 年金の場合～「基礎年金」の創設
  - ①医療保険が、終戦前の時点ではほぼ「皆保険」と呼べる状態にまで到達していたのに対し、年金は、非サラリーマン・グループに対して戦後しばらくの間、制度そのものが存在していなかった
  - ②日サラリーマン・グループを対象とする拠出制の「国民年金」制度が1961年に発足し、これではじめて「国民皆年金体制」が整備された
- \* 当初の国民年金の問題：基礎年金制度の創設
  - ①第一は、サラリーマンの妻が独自の年金権をもたないため、離婚した場合等に不利になる問題
  - ②第二は、「国民年金」は基本的に自営業者の年金制度として出発したが、産業構造の転換により自営業者が減少し、サラリーマンが増えたことで、保険料負担の担い手が減少し、国民保険財政が厳しくなった
  - ③これらを解決するため、「第2段階」として、国民年金、厚生年金、そして共済年金の区別を取り払って国民年金を、国民すべてに共通の、「基礎年金制度」へと衣替えした（1985年）
- \* 医療保険制度の場合
- \* 医療保険制度間の財政調整
- \* 日本の社会保障制度と費用負担原理
- \* 「無保険」の問題、「無年金」、「低年金」の問題
- \* 社会保障を誰がどのように負担するのか～日本の税制～
- \* 日本の税制の特徴と問題点
  - ①所得税の財政調達機能が弱い
    - (1)所得税の課税ベースが、様々な政策目的によって狭められており、所得税の累進性が阻害されている
  - ②法人税については、国際的に高い税率水準だが、租税特別措置によって課税ベースが狭められている
  - ③逆進的な消費税については、国際的にみてまだ低い税率水準であり、引き上げる余地がある
- \* 所得税の現状
- \* 法人税の現状
- \* 結論
  - ①経済のグローバル化に対応可能な国内税制に改革していく必要がある
  - ②その中で、公平な税制の構築を図る必要がある

- ③所得再分配機能をどの程度、税制の役割とすべきかは議論が必要
- ④消費税の重要性～社会保障の機能充実とセットで考える必要がある
- ⑤一国単位の税制を超えて、グローバル課税を構想する時代に～OECDにおけるデジタル課税論議
- ⑥OECD「税源浸食と利益移転」プロジェクトの重要性

○ 「超高齢社会の現状と地域包括ケアによるまちづくり」 辻 哲夫氏

\* 超高齢社会

- ・個人の長寿化（人生100年）
- ・社会の高齢化（75歳以上、85歳以上）
- ・認知症（ともに暮らす社会）
- ・世帯構造（高齢者一人暮らしが基本）
- ・2040年までが日本の正念場

\* 高齢期の自立度

- ・特に重要な新しい要素（フレイルと在宅医療）

\* 政策の基本方向

- ・地域包括ケア（できる限り元気で弱っても安心して過ごせる地域づくり）
- ・地域包括ケアの深化（自助互助の重要性、テクノロジーを活用）

\* 高齢者介護施設の現状と課題

- ・介護保険制度の定着（高齢者の介護を社会全体で支える仕組みとして、介護保険制度を平成12年より実施）  
（実施後、約7年が経過し、当初約150万人だった利用者が在宅サービスを中心に約200万人増加するなど、介護保険サービスは、身近なサービスとして国民に定着してきている）
- ・介護保険制度の見直し（介護保険の総費用の増大や、今後の認知症や一人暮らしの高齢者の増加といった課題に対応するため、主に平成18年4月より、介護保険制度の見直しを実施）

\* 地域包括ケアシステム

（今後の医療介護政策の方向性は、地域包括ケアというまちづくりがベースに）

- ・生活習慣病予防及び介護予防が基本的に重要
- ・虚弱期のケアシステムの確立
- ・医療政策と地域包括ケア

\* 千葉県柏市での地域包括ケアシステムの具現化；先進事例

- ・柏市の目指す姿（介護保険事業計画に位置づけ）

< 具体的手法 >

在宅医療を含めた真の地域包括ケアシステムの実現

- ①地域のかかりつけ医が合理的に在宅医療に取り組めるシステムの日本のモデルの実現
- ②サービス付き高齢者向け住宅と在宅医療を含めた24時間の在宅ケアシステムの組み合わせによる、真の地域包括ケアシステムの日本のモデルの実現
- ③あわせて、地域の高齢者が地域内で就労するシステムを構築し、できるかぎり自立生活を維持

○ 「地域福祉の現状と課題」

山縣 文治氏

\* 子育て施策をめぐる環境について

- ・ 2040年市町村はどうなっているか
- ・ 人口はどこまで維持できるのか
- ・ 保育所・幼稚園はどうなってきたのか
- ・ 保育所・幼稚園・認定こども園施策の充実で就学前の子育て支援は大丈夫か
- ・ 就学前の「学校教育」は衰退か充実か

\*子育て支援の重要性（現代社会にはびこる3つの病気）

- ・ 子育てを身近に見たり、経験したりする機会が減少したことによって、子どもが育つということの実感がない
- ・ 細かな保健知識や子育て情報が届けられることにより、主体的な判断ができにくい
- ・ 子育てをサポートする資源やサービスがふえ、従来のやり方では対応が困難になっている
- ・ 多様な生き方をすることが尊重される社会となり、子育て以外の生活が重視される

\*子ども虐待について（子ども虐待の支援で意識しておくべきこと）

- ・ 経済的要因はさまざまな問題に影響する
- ・ 社会的孤立はさまざまな問題に影響する
- ・ DV家庭では、子ども虐待も起こりやすい
- ・ 乳幼児期のネグレクトは死につながる
- ・ 大人は自分の非を認めるのが苦手である
- ・ 虐待はさまざまに組み合わさる
- ・ 暴力的であろうが愛着的であろうが、完全に支配されていると、本当のことをいいにくい
- ・ 他の対応方法がわからず、無意識的に虐待をしている人も少なくない
- ・ 人間には回復力がある
- ・ 人は皆楽しく生きたいと思っているが、楽しさは人によって違う

\*少子化対策において重要な視点

- ①人口減少を前提とした社会づくり
- ②数十年先の人口状況を視野に入れた地方の生き残り策
- ③社会全体が出生数の確保に協力する覚悟
- ④女性が地方で子どもを産み育てたいという意識を持つことが可能な社会づくり
- ⑤計画性のない地方の少子化対策は、地方の衰退を招く

○ 「10年後の彼を見つめた就労支援」 野々村 光子氏

～未来への下ごしらえ～

働く⇒人の想いが重なり合って力になる

“働くということ”

私たちは毎日たくさんの「働きたい」と出会う。  
その「働きたい」思いには色んな意味がぎっしり。  
家族への愛や自分のへタクソや自慢したい気持ち。  
稼いだお金で居酒屋へ・・・彼らの「働きたい」と出会う度、

「働くこと」が持つ力の大きさに驚き、学ぶ。  
また「働くこと」は単なる作業ではなく、生きる力を育むステージ・・・  
そんなステージに立つ姿は誰もが真剣、誰もがカッコイイ、  
誰もがほんまもん。輝く場所がここにある。

### 『tekito-』

生活、就労・・・全てその人の24時間の中に存在するもの。  
だからライフスタイルはその人のもの。  
だったら、そのスタイルがその方にとってちょうど適当である方が良い。  
そして、そんな24時間の積み重ねの毎日に地域の風が通り過ぎ、  
その風を感じられるゆとりが持てるテキトーさが存在するならもっと良い・・・

### \*生活困窮者自立支援事業 『遠慮は要らん、配慮を下さい』

〈8時間、フルタイム、即戦力を求める地元企業の社長の考え方が変わった〉

- ・相談には、働くことを窓口生きていくことについて考える
- ・企業にしかできない応援（見る・知る・選択する）
- ・応援方法について：課題はないという視点
- ・生活について：働くことは24時間の中にある
- ・ネットワーク支援：人生のプロセスがほんまもんの履歴書
- ・『就職を目標にしない。かっこええ大人を目指す』
- ・働く力は、生きる力や。（働き続ける力に繋がる）

### 『TEAM 困窮』

時代の流れと共に地域の「困りごと」は見えづらく、そしていつの間にか  
それは「諦めごと」になり始めている。

私たち“働きもん”は、そんな地域の困りごとを救うチームである。

誰が困っても解決できる地域へ・・・

そんな事を目指す彼らは・・・TEAM困窮

### \*凸凹が当たり前の地域へ「明日もがんばろっ」

地域を救う担い手はここに居る。

田舎という場所で、良くも悪くも世間で一番強いもんは、『ウワサ』。

地域の小さな「どうするねん」に、人も困りごととも仕事も集まるウワサを流し続けた。

そして、いつも丁寧な解決をしていく働きもん達の働く姿勢がまた色んなコトを集める。

地域のあちこちの、困っている場所に働きもんの働く姿がある町になりつつある。  
まだ途中・・・そして、地元の企業は、そんな男前を受け入れる門を開いて待っている。

生きづらい人が『住める町』ではなく『住む町』・・・

どんな人生のものがたりもミスはない。

## 6 所感

福祉の関連テーマで、2日間4講座を受講した。

全国市町村国際文化研修所（JIAM）のセミナーは初めてであったが、今回の特別セミナーはどの講座も内容、講師ともに非常に良かった。

超高齢社会や児童福祉の現状と課題を、過去からのデータとともに分析し、国や地方自治体の考え方も含めて、対策と将来の展望を分かりやすく説明され、講義を受けながら浜田市の現状と対比させながら、シビアに理解することが出来た。

特に、最後の講義「10年後の彼を見つめた就労支援」暮らし応援センター“tekito-”センター長 野々村光子氏の話は、2015年ふるさとづくり大賞個人表彰（総務大臣賞）を受賞されたように、障がいのある人やひきこもりの人の就労・生活支援を現場の生の声として届けるだけでなく、お互いの思いや個性を十分に理解し、地域を構成する一員として、将来を展望した一人一人の人生づくりに全力を傾注されている生き方に感銘を受けた。